

金属アレルギー外来

歯科補綴学第二講座 橋 本 明 彦

歯学部の附属病院にはいろいろな科があります。矯正科や小児歯科、口腔外科などは街の歯医者さんでも見かけますからお馴染みですが、他にも幾つか科があり、そのひとつに補綴科があります。本来、この科は冠や入れ歯などで咬み合わせや見た目を補うところなのですが、第二補綴科では金属アレルギー外来を開設し、金属アレルギーが疑われる患者さんの診断や治療を行っています。

それでは金属アレルギーとはどのようなものなのでしょうか。

1. 金属アレルギーとは

10年ほど前から、金属アレルギーという言葉がテレビや出版物などで取り上げられているので、もうご存じの方も多いかもかもしれません。金属そのものは本来アレルギー性を示しません。中には、鉄や亜鉛など体に必要なものもあります。その金属がどのようにアレルギーを起こすのでしょうか。

それは、日常私たちに接触している金属が何らかの理由で溶けてイオンとなり、たまたま近くにあった皮膚や血液中などの蛋白質と結合することから始まります。これが、血液中のT-リンパ球と呼ばれる細胞に抗原として認識されると、アレルギーが成立します。一度、抗原として認識されると、以後同様にイオン化した金属が蛋白質と結合して体内に侵入すると異常な過敏反応がおきます。これが金属アレルギーといわれるものです。

金属アレルギーの多くはIV型アレルギーに属しますが、このタイプのアレルギーはアナフィラキシーや、蕁麻疹などに比べ症状の発現に時間がかかるので遅延型アレルギーとも呼ばれています。では、歯科と金属アレルギーはどのように関わっ

ているのでしょうか。また、関わりをどのように診断していくのでしょうか。

2. 金属アレルギー外来での診断

通常金属アレルギーによって起こる病気として知られているのは接触皮膚炎です。ネックレスやベルトのバックルなどにかぶれる方もいらっしゃるのではないのでしょうか。これらは原因となるものがすぐに特定できるのでよいのですが、一度、体の中に侵入してしまうと、症状が遠隔部位にでてしまうので原因の特定が困難です。女性のピアスは皮膚を貫いて体内に金属が入っているので溶出した金属イオンが蛋白質と結合しやすく、しかも耳たぶのみならず、手や足などにも症状がでることがあるので要注意です。同様に、近年は口の中の冠や詰め物に使用される金属も注目され、口の粘膜に留まっている場合は口の中に症状が限局しますが、溶けた金属イオンが腸管や、血管を介して吸収されると全く違う場所に症状がでることがあります。金属アレルギー外来では、まずこれらの金属にアレルギーがあるか、あった場合にその金属が実際に口の中に使われているかどうか



(写真1)

を診断します。通常行われている方法は次の二段階にわかれます。

1) パッチテスト

これは、皮膚科領域ではよく行われている方法で、金属試薬を背中などに張り付けて反応を見ます。ある金属に遅延型アレルギーがある場合、全身の皮膚がその金属に感作されています。パッチテストは健康な皮膚に試薬を張り付けることで人工的にアレルギー性皮膚炎を起こさせ遅延型アレルギーの有無を判定するものです(写真1)。

この検査は保険適用ですので費用はわずかですし、専用のパッチテストコーナーを設けています(写真2)のでプライバシーも守られます。

2) EPMA分析

聞き慣れない言葉だと思いますが、簡単にいうと成分分析法の一つです。パッチテストで何らかの金属にアレルギーが認められた場合、口の中に入っている金属の成分を調べます。しかも、それらを削ったりはずしたりせずにとちょっと研磨をする要領で、わずかな金属試料を採取します。ですから採取後に噛めなくなったり見栄えが悪くなったりということもありません。場合によっては眼鏡のフレームや、体内に埋め込んである骨の固定用スクリューの成分も調べることがあります。EPMA分析は保険が利きませんので、調べた試料数によって少し金額がかかります。

それでは、実際にどのように治療していくのでしょうか。



(写真2)

3. 金属アレルギー外来での治療

1) 金属の除去、仮の修復

EPMA分析によってアレルギーの原因となる金属が口の中に使用されている場合、これらの金属を除去していくことになるわけです。もちろん外したままでは、食事や発音に支障が出ますからアレルギーのない材料で仮の歯や仮の入れ歯を装着します。

2) 経過観察

外すべき金属を全て除去すると仮の歯の状態ですばらく経過を観察します。すぐに症状が良くなる方もいますが、良くなり始めるのに平均では2、3ヶ月かかります。また、症状の種類によっては除去によって効果が現れない場合もありますので、EPMA分析でアレルギーのある金属が使われていても患者さんに十分説明の上除去を開始しますのでご安心下さい。

3) 最終修復

経過観察の後、仮歯の部分を最終的な材料で再治療します。主にパッチテストでアレルギーの無かった金属を成分にしている材料を使用しますが、アレルギーを絶対に起こさない金属は存在しませんので、場合によってはセラミックや樹脂材料を使用することもあります。中には保険の利かない高価な材料もありますので、こちらも、性質や治療費などについて十分相談の上材料を選択しています。

すでに書いたとおり、金属は溶出して蛋白質と結合しなければアレルギーを起こしません。ですから、口の中の金属が溶けない環境を私たち歯科医と患者さんとで作っていく必要があります。今回は少し難しい話もあったかと思いますが、皆さんに金属アレルギー外来を知っていただく一助になれば幸いです。下記のアドレスに金属アレルギー外来のホームページも開設されていますので、ご不明な点はお気軽にお問い合わせ下さい。今後とも金属アレルギー外来をよろしく願います。

ホームページのURL

<http://www.dent.niigata-u.ac.jp/hosp/allergy/index.html>